

## Michel Houellebecq and Huysmans: on “misogyny” in *Soumission*

KUMAGAI Kensuke

Keywords: Gender, Fin de siècle, Religion, Contemporary Literature

### Abstract

In this article, we examine Michel Houellebecq’s *Soumission* (2015) and the question of “misogyny” from the point of view of intertextuality with the works of nineteenth-century French writer Joris-Karl Huysmans. *Soumission*’s hero, François, was a scholar of Huysmans and provides many comments on Huysmans’s novels, from *En ménage* (*Married Life*) to Durtal’s conversion series of *Là-bas* and *En route*, during the political disorder that led to the election of the president of the Muslim political party in France in 2022, as if it was necessary for him to follow Huysmans’s lessons, in search of religion and love for his survival in this situation. We argue that these two questions will be reunited in fantasies of women (Madonna’s maternity, women providing sexual comfort and the comfort of home...) in Houellebecq’s *Soumission* and Huysmans’s works.

At first glance, *Soumission* seems to depict François’s conversion to Islam; however, before this dubious rebirth, he visited two Catholic sanctuaries (Rocamadour, Ligugé) and almost converted to Catholicism. For him, the Black Madonna Child Rocamadour appeared to be too powerful and majestic to embrace him as a mother, while Huysmans’s suffering Christ figure was different from François-Houellebecq’s religious vision, which doesn’t exclude physical pleasure. This missed maternal love is suggested by the episode of his mother’s isolated death from both family and the main story. Despite his frustration, he believes in the value of “compassion” supported by Schopenhauer as the basis of morality and regarded as a feminine and Christian quality, while he is simultaneously at-

tracted to the logic of “submission” insisted on by Nietzsche and regarded as a Muslim principle (**Chap. 1: To a “maternal” religion?**).

However, Houellebecq’s works are not only characterized by religious questioning in modern society (the necessity of God’s existence) but also by physical questions concerning food and sex. We argue that François discovers the essential of Huysmans while choosing dishes in the Brussels restaurants and defines it as the bourgeois’ happiness of sharing food and drink, as in the scene of welcoming the Carlaix couple in *Là-bas*. Indeed, Huysmans’s food is always linked to religious tenderness for his unmarried protagonists and performs as a narrative motif inserted in the pedantic discourse. As for Houellebecq’s *Soumission*, characters often enact a tragedy resulting from the loss of good food in an appropriate situation. In any case, after Huysmans’s *En ménage*, François’s fantasy consists of sitting around the kitchen table with the “woman pot-au-feu” serving delicious dishes; it arouses a misogynist image, even if Houellebecq proposes this idea in the context of his criticism of modern occidental liberal society (**Chap. 2: Kitchen table and woman**).

In conclusion, Houellebecq’s feminine stereotypes as maternal and sexual figures may occur from (symbolic and real) “Mother” loss and stand in stark contrast to the will of heritage from father to son, from Huysmans to Houellebecq in French literature history. We will examine his works as the patterns of family romance.

# ミシェル・ウエルベックとユイスマンス ——『服従』における《女性嫌悪》をめぐって

熊谷謙介

## はじめに

出版当日にシャルリ・エブド事件が起こり、近未来のフランスにイスラーム政権が誕生するという設定とあいまって、国内外で大きなスキャンダルを呼んだミシェル・ウエルベックの『服従 *Soumission*』については、「反イスラーム的」「極右文学」というレッテルを貼られたり、それだけでなく政治やイスラーム教という文脈から語られることが多かった。2022年の大統領選挙で、極右勢力のマリーヌ・ル・ペンとムスリム同胞団 *Fraternité musulmane* の党首が決戦投票となり、後者が社会党や中道右派の支持を集めて勝利するという筋書きは、フランスの社会情勢の問題を浮き彫りにした点で興味深いものの、小説作品は、政治や宗教を語る、真実であるかどうか問われる「言説」であるよりは、ある社会状況に置かれた登場人物の思考や感情の揺れを描く、妄想や無意識も含みこむ「つぶやき」のようなものとして考えるべきであろう。条件法で語られる結末に象徴されるように、主人公、そしてウエルベックの政治的な位置は確定しがたいものになっている。

たとえば、『服従』は多くの論者から、フランスがイスラーム勢力に征服されるという「イスラーム恐怖 *islamophobie*」を煽っていると批判さ

れ、「最も間抜けな宗教はイスラーム教」という彼の過去の言葉と重ね合わせられて糾弾されることもあった<sup>1)</sup>。しかし、この作品が当初『改宗』と題され、主人公フランソワの「キリスト教への改宗」を主たる筋書きとしながら、そこに大統領選挙の挿話を加えることで、「イスラーム教への改宗」へと路線変更していったことに示されるように、宗教に対する認識に明らかな変化が見られる<sup>2)</sup>。イスラーム教に改宗して大学の学長になった人物との対話で、「人間の幸福の頂点は、最高度に絶対的な服従の中にある」という言葉を聞き、神の存在について思考するに至るフランソワの姿だけを取り出せば、この作品には反イスラーム的な面よりむしろ、すべてが自由で選択できるが故に、自己責任も、競争の結果負け犬となるリスクも負わなければならない西洋文明の極点にあつて、神に絶対的に服従するが故に逆説的に解放され安らぎを得るイスラーム教に可能性を求める、親イスラーム的な面が見られる。

しかし、この「服従」に至る長い過程こそ見逃してはならないものである。それは第一に、この服従の図式が人間の神への服従だけでなく、女性の男性への服従にも当てはめられている点である。フランソワの一夫多妻

1) このようなイスラーム教に対する作品内での言及、またインタビュー内での発言については、思想的な背景とともに、ウエルベックを育児放棄し、後にイスラーム教に改宗した実母への憎しみも無視することはできず、それは同時に自らの女性嫌悪の原因だったとウエルベック自身は自己分析している。Eugénie Bastié, «Tue-l'amour», *Figaro hors-série*, Michel Houellebecq, No.98 (2016), p.74-75.『素粒子』やいくつかの詩作品では「父」や「母」への嘲りが見られるが、「間抜け con」という性的な意味も含む語を用いており、「最も間抜けな con 宗教はイスラーム教」という言葉についても、こうした点から検討することができるだろう。

2) 『ある島の可能性』(2005)においても、近未来の西欧社会においてイスラーム教が広がるという予見が語られていた。家庭を象徴するイザベルとも、性愛を象徴するエステルとも、うまくいかなかったダニエル1に対して、長いときを経て再会したイザベルは次のように語る。「男性は、矛盾するもの、相反するものを欲しがっているの、おそらくね。まあ、今は、というかこの最近、女性も同じだけれど。結局、一夫多妻というのが、正解だったのかもしれない [……] 悲しいけれど、ひとつの文明が崩壊していく。悲しいけれど、このうえなく優れた英知が失われていくの—最初、人はなんとなく人生に居心地の悪さを感じるようになり、最後にはイスラミ共和国の建設を願うようになる」(『ある島の可能性』角川書店、二〇〇七年、三一〇—三一三頁。La Possibilité d'une île, Fayard, j'ai lu, p. 322-323.)

制への憧れとその実現がフランスではとくに言及されたが（一夫多妻制への批判は、一面では西洋的価値観にのっとったオリエンタリズムに属するものと言える）、作中の至るところで、性的役割分業など性のステレオタイプ化が見られる。本論稿の主題となる「女性嫌悪 *misogynie*」は語源としては「女性への憎しみ」を意味する語であるが、ここでは生理的嫌悪から思想的、イデオロギー的差別まで、女性恐怖から性的搾取まで、さらにはステレオタイプ化の一つとして過剰な理想化を行うあまりに、現実の女性に幻滅するといった現象まで指し示す概念として使用したい<sup>3)</sup>。本論でも見ていくように、一方で女性の原理に対する賛美を惜しまないウエルベックにおいて、女性嫌悪、あるいは「反フェミニズム的」な思考の要点がどこにあるのか<sup>4)</sup>、その背景を作品分析から探るのが課題となる。

それは同時に、男性主人公を通した「男性性」を検討する機会ともなる。ウエルベックの作品はすべて西洋白人男性を主人公としたものとなっているが<sup>5)</sup>、まずは、『闘争領域の拡大』の男性二人や『素粒子』のブリュノに代表されるように、彼らの多くがヘゲモニックな男性性から外れた、性を満足させられない「もてない男」であることは否定できない<sup>6)</sup>。しかしもう一方の系列の男性性として特徴的なのは、『素粒子』のミシェルや現

3) 「女性嫌悪」については次を参照。Maurice Daumas, *Qu'est-ce que la misogynie?*, Éditions Arkhê, 2017. 上野千鶴子『女ざらいーニッポンのミソジニー』紀伊國屋書店、2010年。

4) ウエルベックは一方では、ラディカル・フェミニスト、ヴァレリー・ソラナスの著作の後書きを記しているように (Michel Houellebecq, «l'humanité, second stade», *Interventions 2*, Flammarion, 2009)、ポリティカル・コレクトネスに還元されるようなフェミニズムのあり方に異議申し立てをしているように思われる。

5) ウエルベックの小説がすべて、限りなく作者に近い立場をとる登場人物を視点の中心としていることが、登場人物の言説をウエルベックの見解と同一化させる回路を作っており、ウエルベックが引き起こすスキャンダルの原因の一つとなっている。

6) 野崎敏「人間の終わり、小説の再生—ミシェル・ウエルベック『素粒子』」『フランス小説の扉』白水社、二〇〇一年、二一五—二三七頁。Douglas Morrey, «Sex and the Single Male: Houellebecq, Feminism, and Hegemonic Masculinity», *Yale French Studies*, No. 116/117 (2009), pp. 141–152. 男性性が一枚岩のものではなく階層性をもつという理論については次を参照。R. Connell, *Masculinities*, Polity Press, 1995.

代芸術の世界に生きるジェド（『地図と領土』）に見られるような「性的に淡白な」男性であり、『服従』の大学教員フランソワは、年度ごとに別の女子学生と付き合いつつ、満足を得ることなく虚無的な独身者にとどまっているという点で、いわば両者の系譜の中間に位置づけられるだろう。

女性嫌悪はこのような男性性の投影としても考えるべきだが、性のイメージという主題を解明する上でも重要なのが、主人公フランソワが19世紀末の作家ユイスマンスを研究する、パリ第3大学の教員であるという設定である。それは一方では大学小説として、冒頭で示されているように、大学研究者の虚無的な生活を通じて西欧現代社会の空虚、アノミーを浮き彫りにするという意図もあっただろう。また作品中で登場人物が過去の文学作品を読み、その古典の筋書きが登場人物の生に影響を与えるという点では、ポストモダン小説に見られる語りの複雑化の試みと言えなくもない。しかしウエルベックが選択したユイスマンスは、単なる知的操作のために選ばれた任意の対象にとどまらない。「孤独な青春時代、ユイスマンスはぼくの誠実な心の友であり続けた。それを疑ったことはなかったし、彼から離れ、他の作家に心を向けようと思ったこともなかった」<sup>7)</sup>は『服従』の冒頭の文章だが、フランソワの内心の語りはむしろ、ウエルベック自身による「文学の顕彰と擁護」のような様相を呈していく。

ただ文学だけが、他の人間の魂と触れ合えたという感覚を与えてくれるのだ。その魂のすべて、その弱さと栄光、その限界、矮小さ、固定観念や信念。魂が感動し、関心を抱き、興奮しまたは嫌悪を催したすべてのものと共に。文学だけが、死者の魂ともっとも完全な、直接的でかつ深遠なコンタクトを許してくれる<sup>8)</sup>。

7) ミシエル・ウエルベック『服従』大塚桃訳、河出書房新社、2015年、七頁。Soumission, Flammarion, 2015, p. 11. (以下それぞれ、『服従』、Soumissionと省略する。)

8) 同書、九頁（一部訳語を変更）。Soumission, p. 13.

友人たちとの会話でもありえない魂の交流が、文学を通じてのみ行われるのであり、実際、「孤独な青春時代」を博士論文審査により終え、大学に就職し情熱を見出すことなく教育活動を続けるなか、フランソワは大統領選などいろいろな事件が重なる中でも、ユイスマンスの作品の再読をやめないのである。作中の端々にフランソワの作品評が見られるが<sup>9)</sup>、それは研究に結びつけるためのものというよりはむしろ、自らの生の指針とし、あるいは自らとの距離をはかる参照点とするためのものと言える。

実際、前述のとおり物語の中心はフランソワの改宗への遍歴であるが、途中までは同様に自然主義から出発しながらもカトリックに改宗したユイスマンスの道筋をたどるという構成であり、実際にフランソワはユイスマンスが訪れたりギュジェの修道院をたずねることとなる。ユイスマンス自身『出発（途上で）*En route*』（1895）において、自らの投影である主人公デュルタルが、満ち足りない魂の救いを求めてさまざまな教会を彷徨い歩く「道行き route」を描いている。この枠組みを『服従』が継承しているのは、その冒頭のエピグラフに据えられた『出発』からの引用で確認できる。

ぼくは、香と蠟燭の雰囲気酔ってカトリックの教義にとりつかれ、その周りを徘徊し、祈りによって涙を流すまでに感動し、詩篇の朗唱や聖歌は骨の髄まで染みこんでいた。ぼくは自分の人生には嫌気がさし、自分自身に愛想が尽きていたが、では、別の人生を送るのかと言われれば、それは別の話だった。それに……。礼拝堂ではぼくの心は

---

9) ウエルベックは『服従』についてのインタビューで、フランソワが表明する文学観・作品論は自らの見解による「文芸批評」であることを告白している。「Dieu ne veut pas de moi - Entretien avec Michel Houellebecq réalisé par Valérie Toranian et Marin de Viry», *Revue des deux mondes*, juillet-août 2015, p.22; «Michel Houellebecq, de conversion en soumission, interview par Jacques Henric et Catherine Millet» *Artpress*, 8 Janvier 2015 <https://www.artpress.com/2015/01/08/michel-houellebecq-de-conversion-en-soumission-interview-par-jacques-henric-et-catherine-millet/>

乱されるのだが、そこを出ると同時に、情動は失われ、心は渴ききつてしまうのだった<sup>10)</sup>。

「徘徊し je rôle」という言葉に示されるように、『出発』と『服従』はともに、作者と分かちがたい主人公が、宗教的な救いに向かって希望と失望を繰り返す一種の遍歴物語である。ユイスマンスについては、このような物語形式は『出発』にはとどまらない<sup>11)</sup>。ウエルベックにおいても『ある島の可能性』(2005)では、主人公がエロヒム教団というクローン技術を擁した宗教団体の本部を好奇心から訪れ(ウエルベック自身も多大な興味をもって訪れている)、クローン生成のための遺伝子の譲渡へと至るといふ改宗が描かれるのであり、そこでは仏教的なもの(輪廻転生)への願望がほのめかされていた。ウエルベックにとってユイスマンスは、第一に「自伝的語りによって遍歴を描く」という物語形式の祖として存在していると言える。本論ではまず、フランソワの改宗へと至る宗教的遍歴をユイスマンスのそれと重ね合わせつつ見ながら、両者が袂を分かつ点を、〈母〉という女性表象の位置から考察していく(第1章)。

もう一つのユイスマンスの遺産は、「独身者小説」という枠組みである<sup>12)</sup>。ユイスマンス作品のほとんどが結婚をしていない孤独な男性であり(後に見る『所帯で *En ménage*』においては、結婚しているものの冒

10) 『服従』五頁。*Soumission*, p.9. 次の引用である。Joris-Karl Huysmans, *En route* (1895), éd. Dominique Millet, Gallimard, coll. Folio classique, 1996, p.74.

11) 「自伝的小説」という形式は、『出発』を中核とするデュルタル四部作に顕著だが、それ以前の作品についても、ユイスマンス自身が自らの作品について指摘していたことである。「ユイスマンス氏の著作の最大の欠点の一つは、私に言わせれば、どの作品でも主人公が同じ一つのタイプしかないことだ。シプリアン・ディバイユもアンドレも、フォランタンも、デ・ゼッサントも、つまるところただ一人の同じ人物が、異なる環境に置かれたというだけである。そしてきわめて明白なのは、この人物がユイスマンス氏自身であるということだ。」(A・ムニエの筆名で、実際にはユイスマンス自身が書いた批評) ハブロック・エリス『ユイスマンス—デカダンスの美学』所収、山本規雄訳、二〇一三年、一一五—一一六頁。

12) Jean-Pierre Bertrand et al., *Le Roman célibataire. D'À Rebours à Paludes*, José Corti, 1996.



頭で妻に去られたアンドレの顛末が描かれている)、職業は文筆家や芸術家など、自由な生活を享受する相対的に自立した存在であり、妻子を持ち家産を継承していくような、当時のヘゲモニーと言ふべき「ブルジョワ的男性性」から逸脱した存在であった<sup>13)</sup>。『服従』以前にウエルベックの作品と世紀末精神、とりわけユイスマンスと関連づけたイェム・ファン・デル・ポエルによれば、彼らの作品の登場人物は共通して、男性的アイデンティティの危機に直面しているとしている<sup>14)</sup>。また独身者における女性と食とセックスの連関については、ジャン・ボリによるユイスマンス研究をはじめ、ウエルベック作品においても指摘される所であり、本論で詳述する。ここでは、料理や片付け、洗濯など、わずらわしい日常の家事を担当してくれる女性の存在を求めつつ、独身者としての自由な生活を謳歌するために妻という同居人をもつことを避けようとする心性を指摘したい。一生独身を通したユイスマンスにとっては、長く続いたアンナ・ムーニエという女性との関係がこれに当たるだろう。

最後の点について、『服従』のフランソワはこれに該当するのだろうか。ユイスマンスの「独身者」について、ジャン・ボリは「恋愛の嫌悪」と特徴づけているが、ウエルベックは「家庭」そして女性と共に生きることについて、どのように語るのか、どのように表象するのかを検討していきたい。そこで浮上してくるのが「共に食べること」という行為の重要性であり、『服従』そしてその中で引用されるユイスマンス作品の食事の場面に<sup>15)</sup> 考察していく(第2章)。

13) Jean Borie, *Huysmans. Le diable, le célibataire et Dieu*, Grasset (Kindle), 1991. <http://amzn.eu/2qdt7Fg> ジャン・ボリによる研究、またその「ダンディ」とも言える人物そのものに、ウエルベックが影響を受けたのではないかという仮説を提示した論文がある。Alain Corbellari, «L'Écrivain et le Professeur. Michel Houellebecq et Jean Borie: lecture croisée», *Colloques en ligne "Les "voix" de Michel Houellebecq"* (2016) <http://www.fabula.org/colloques/document3741.php>

14) Ieme van der Poel, «Michel Houellebecq et l'esprit "fin de siècle"» *Michel Houellebecq*, Sabine van Wesemael éd., Rodopi, 2004, p. 50-51.

15) その他、ウエルベックとユイスマンスの関係を中心とした研究は以下のものが挙げられる。

本論に入る前に、『服従』において特徴的な女性嫌悪の場面について概観することで、ウエルベックによる言説操作の特色に注目したい。まず、作品の冒頭、付き合っている女子大生ミリアムとの会話である。フランソワの自宅に入ったミリアムは模様替えしたカーテンについて趣味が良いとほめながら「まあ、マッチョにしてはだけど」と言い添えるのを忘れない。

「あなたはマッチョだ、と言ってもいいかしら」

「分からない、そうかもしれない、ぼくは多分いいかげんなマッチョなんだ。実際のところ、女性が投票ができるとか、男性と同じ学問をし、同じ職業に就くことがそれほどいい考えだと心から思ったことはない」<sup>16)</sup>

ここで「いいかげんな」と訳されているのは *approximatif* という語で、「曖昧な」「適当な」という意味であるように、フランソワの態度表明はまったく「いいかげんな」ものに聞こえる<sup>17)</sup>。ミリアムは驚いて目を瞬き、フランソワはそれに気づき「少し」考えてみたが、「答えを自分は持っていないことに気が付いた。どちらにしても、どんな問いに対してだって自分は答えなど持っていないのだ」と思うだけであり、どのような立場にも与そうとしないのである。一方で、思考というものはこのように茫洋なも

---

Reginia Gagnier, "The Decadence of the West in Huysmans and Houellebecq: Decadence in the Longue Durée", *English Literature in Transition 1880-1920*, Vol. 60. ELT Press, 2017, pp. 419-430; Carine Roucan, «J.-K. Huysmans, un personnage clé de *Soumission*», Antoine Jurga et Sabine van Wesemael (éd.), *Lectures croisées de l'œuvre de Michel Houellebecq*, Classique Garnier, 2017, p. 137-150; Morgane Leray, «Un autre dix-neuvième siècle: Michel Houellebecq décadent?», Sabine van Wesemael et Bruno Viard (éd.), *L'Unité de l'œuvre de Michel Houellebecq*, Classiques Garnier, 2013, p. 281-291.

16) 『服従』前掲書、三五頁。*Soumission*, p. 41.

17) ジャン＝ノエル・デュモンは、ウエルベックにおける「少し *un peu*」「ほとんど *à peu près*」「ある種の *une sorte de*」といった曖昧表現の機能について指摘している。Jean-Noël Dumont, *Houellebecq. La vie absente*, Manucius, 2017, p. 16-20.

のでしかないというのが現実である、という見方もできるだろう。ポリティカル・コレクトネスに代表されるような、言説を制限する圧力に対する距離とも見ることができるかもしれない。

しかし、ミリアムが聞き返せば、フランソワは家父長制が存在し続ける理由があることを語り始めるのであり、こうした家族観の思想的背景は作中のさまざまな箇所でも語られている。女性差別的な発言などを曖昧模糊とした、それ故に現実感を帯びたものにしつつ、それを理論的言説と共存させている点が、ウエルベックの作品の特徴と言えるだろう。

もう一つは、作品の終盤、フランソワがイスラーム教への改宗を説得される場面である。学長ルディジェはイスラーム教の人に対しては冒瀆のだと思われるので言ってこなかったアナロジーに訴える。それは一般にはボルノ小説として名高い『O嬢の物語』であり、「人間の絶対的な幸福が服従にあるということは、それ以前にこれだけの力を持って表明されたことがなかった。それがすべてを反転させる思想なのです。[……]『O嬢の物語』に描かれているように、女性が男性に完全に服従することと、イスラームが目的としているように、人間が神に服従することの間には関係があるのです」<sup>18)</sup>と述べるのである。

「服従」という本書のメインテーマにつながる箇所だが、イスラーム教と『O嬢の物語』という意想外の連関は、どちらか片方を支持する人にとってはきわめてスキャンダラスなものに聞こえるだろう。しかしこの類推によって、一方でイスラーム教の本質とされるものは、西洋の性愛文化の極点に位置するような作品の中に取り込まれるのであり、他方では、『O嬢の物語』に見られる欲望が、服従という思想に置き換えられて普遍的なものとしてされるのである。それはいわば、ペルシャの側から西洋を眼差すという想定で書かれた、モンテスキューの『ペルシャ人の手紙』が果た

18) 『服従』二五一一二五二頁。Soumission, p. 260.

したような機能をもっている。ウエルベックは一種の思考実験として、西欧社会が基盤としてきた価値観に反する言説を作品中に投入することによって、両者に波風を立て、相互の認識の改変を迫っているのだと言えよう。そしてここにもまた、ウエルベックの作品の言説のとらえがたさの原因があるように思われる。

## 第1章 〈母〉なる宗教へ？

### ロカマドゥールの黒マリア

『服従』は、フランソワの目を通した、ウエルベックそして西欧社会のイスラーム教に対する見方を中心に議論されがちだが、既に述べたように作品の途中までは、ユイスマンスの回心体験に沿って、フランソワのキリスト教への改宗が成立するのか否かが問われている<sup>19)</sup>。フランソワは大統領選挙の決選投票日にフランス南西部に向かい、マルテル<sup>20)</sup>で同僚の夫で諜報機関に勤めていたタヌールから、勝利を収めるイスラーム同胞団のモアメド・ベン・アッベスについての興味深い話を聞くが、合わせて、黒マリアが見下ろす中世の巡礼地、ロカマドゥールに行くことを勧められる。のちに精神的な危機に陥ったフランソワは、ユイスマンス自身が滞在したりギュージェ修道院も訪問するが、ここではロカマドゥール訪問の場面に焦点を当てたい。

19) 『地図と領土』では、登場人物ミシェル・ウエルベックのキリスト教への改宗が言及されている。「『素粒子』の作者は生涯、呵責なき無神論を標榜していたが、六ヶ月前、クルトネの教会で洗礼を受けていた。そう知ってだれもが一驚した。」「地図と領土」野崎歓訳、筑摩書房、二〇一三年、二九三頁。La Carte et le Territoire (2010), éd. Agathe Novak-Lechevalier, GF Flammarion, 2016, p. 318. ウエルベックの『服従』以前のキリスト教観については以下も参照。Pawel Hladki, «Le christianisme dans l'œuvre de Michel Houellebecq», Wesemael et Viard (éd.), *L'Unité, op. cit.*, p. 125-135.

20) マルテルは作品中でも言及されるように、フランク王国の宮宰カール・マルテルに由来する地名であり、732年のトゥール・ボワティエ間の戦いでイスラーム勢力の北上を食い止めた人物のほめかしであるが、タヌールは「今や我々は、イスラームとは和解し、同盟を結ぶ時期に来ているのではないでしょうか」（一四一頁）とまとめている。

フランソワはロカマドゥールに一ヶ月以上も滞在して、毎日ノートル＝ダム礼拝堂に行って黒マリアを見つめ続けるが、マリアは次のように描写されている。

聖母は背筋を正して座っている。閉ざされた目で、世界の奥深くを見つめているようで、まるで地球外から来たようにさえ見える。額を飾るティアラ。子どものイエスは——といってもまったく子どもらしい顔つきではなく、大人、または老人のようでさえあるのだが——ぴんと背筋を伸ばして母親の膝に腰をかけている。彼の目も閉じていて、顔つきは陰しく、賢そうで、力強い。頭に載せられた王冠。彼ら母子の態度には優しさや、母性の表れはまったく見られない。子どもの姿で表されているのはイエスではない。それはすでに、世界の王なのだ<sup>21)</sup>。

聖母子像にフランソワは母性や子どもらしさではなく、王族のような峻厳とした態度を見てとる。「優しさ *tendresse*」、すなわち激しい情熱とは切り離された情愛を感じるができないのである。ここで言う「母性」は原語では *abandon maternel*、つまり「母の献身＝信従」であり、「服従」の主題が隠されているが、この黒マリアはそれとは無縁の存在なのである。

一方、「この手の超人間的な表象は、マティアス・グリュエネヴァルトが描き出し、ユイスマンスに感銘を与えた苦しみもだえるキリスト像の対極にある」<sup>22)</sup>と語られる。実際、ユイスマンスは繰り返しグリュエネヴァルトのキリスト像を賞賛する文章を書いているが、それは一言でいえば苦悩 *souffrance* の表象としてのキリスト像であった<sup>23)</sup>。ウエルベックは口

21) 『服従』一五九頁。 *Soumission*, p. 166.

22) 同書。

23) たとえばデュルタル四部作の第一作『彼方』では「肉体の悲しむべき不潔を表わし、靈魂の限

カマドゥールの「強い」「超人間的な」母子像から距離をとって、ユイスマンスが称える「弱い」「人間的な」キリストへと向かうのだろうか？しかしその後提示されるのはむしろ、ユイスマンスのヴィジョンとは異質なものである。ユイスマンスの「中世」がゴシック後期の、個人主義が始まり、最後の審判に際して個人の選別が行われるとされた時代であるのに対して、民衆が全体として救済されるロマネスク期の中世への夢が繰り返し広げられる。フランソワもまた「ロカマドゥールの聖母の前で夢想することが長くなるにつれ、自分の個人性が溶け出して行くのを感じていた」<sup>24)</sup>が、自由や責任を伴う個人主義に対するウエルベックの痛烈な批判を考えれば、自己と他者の溶解はまさしく脱自（エクスタシー）の状態であり、苦痛を受け入れるキリストの倫理とは相容れないものであった<sup>25)</sup>。この点については後述したい。

そろそろパリに帰らなければならないと感じはじめたフランソワが礼拝堂に向かうと、シャルル・ペギーの詩の朗読会が行われていた。「母よここに激しく闘ってきたあなたの息子たちがいます」「母よここにあなたの息子たちと強力な武器があります」「母よここに多くの命を失ったあなたの息子たちがいます」という詩節冒頭の詩句が印象的な「イヴ」の詩句を通して、黒マリアの像は「故国の、故郷の土地への愛着、そして兵士の男性的な勇気を讃える」母を呼び起こすが、フランソワはそれとはま

---

りない苦悩を昇華させる […] 芸術の深奥と枢要とをきわめつくした傑作」と評される。ユイスマンス『彼方』（1891）田辺貞之助訳、創元文庫、一九七五年、一八頁。ユイスマンスのグリュエネヴァルト論については以下を参照。Huysmans. *Une esthétique de la décadence*, André Guyaux (éd.), Slatkine, 1987. 江島泰子『世紀末のキリスト』国書刊行会、二〇〇二年、二四〇—二四八頁。泉美知子「ユイスマンスと北方プリミティブ派絵画—19世紀美術研究の射程から」『国際交流研究：国際交流学部紀要』第18号（2016）、一〇三—一三五頁。

24) 『服従』一六〇頁。Soumission, p. 167.

25) アンリ・カンタンは、ユイスマンスの最後期の作品『腐爛の華—スヒューダムの聖女リドヴィナ Sainte Lydwine de Schiedam』において克明に描かれた、犠牲に供される苦痛の身体について、ウエルベックが作中で言及しなかったことを惜んでいるが、それは上記の理由によるものだろう。Henri Quantin, *Couvrez ce saint: Pour un catholicisme blasphématoire*, Editions du Cerf (Kindle), 2015. amzn. eu/8nV5S5Z

た別のものを見出す。「それは、母を慕う子どもの欲望というものでもなくて、なにか神秘的な、祭祀的な王の権威にふさわしいものだった。ペギーはそれを理解できず、ユイスマンスはなおのこと理解できなかった」のである。絶対者として君臨する黒マリアも、ペギーの好戦的なイヴも、ウエルベックが求める〈母〉の条件を満たさないのであり、フランソワは「その存在と触れあえなくなっていて、[……] 教会のベンチに小さくかがみ込み、しなびて、縮んでいった」のである。

これを単純に「歴史的距離」<sup>26)</sup> という理由に還元することはできるのだろうか。ウエルベックは、現代から距離をとり過去の思想をさかのぼる反時代主義という謗りをまったく恐れていない作家であり、むしろ個人主義の時代から一体主義の時代へ、ゴシックからロマネスクへと、より歴史的距離を広げていこうとしているのである。彼はベルナル＝アンリ・レヴィとの往復書簡『パブリック・エネミーズ』において、「先祖がそうしたように、神をただそのまま信じ、母なる宗教の胸の中に帰ること」<sup>27)</sup> の憧憬を語り、ペギーの「イヴ」、そしてボードレルの「貧者たちの死」の一節を引用しているが、聖母マリアの「伸ばした二本の腕の中に崩れ落ちることができる」、「食べて眠り、落ち着くことができるという、聖書に書かれた有名な旅籠」というように、彼の宗教のヴィジョンは、母に抱かれて安楽を得ることができる、きわめて母性的なイメージに基づいているといえよう。ロカマドゥールにおいて聖母への接近が妨げられたもう一つの理由については、後述したい。

26) John Attridge, «Houellebecq's Occidentalism», *Australian Humanities Review*, 62, November 2017, p. 73.

27) Michel Houellebecq et Bernard-Henri Lévy, *Ennemis publics* (2008), Flammarion, J'ai lu, 2011, p. 143.

## 母の死

ロカマドゥールでの回心の不成立の後、フランソワはパリへと帰るが、郵便物の山の中から彼が発見するのは、長く連絡をとってなかったと思われる母の死と、身元引受人がいらないために共同墓地へ埋葬されたことを知らせる一連の通知であった。離婚した父にも連絡がされていたはずだが、父も手紙に返事をしなかったに違いなく、徹底的に孤独な死が、まさにダイレクトメールの束に挟み込まれるように記述されるのである。

これはまずアンリ・カンタンが示すように、ロカマドゥールの聖母マリアの挿話と対応して併置されていると言える。〈母〉への接近の失敗は現実の家族関係にも引き継がれるのである<sup>28)</sup>。しかしより重要かつ深刻と言えるのは、この言及以降、物語において、母の死がいかなる挿話も引き出さない点であり、いかなる葛藤も生まない死ということである。

これを父の死との対比から考えてみたい。同様に長く会うことのなかった父の死を、フランソワは父のパートナーからの電話で知ったが、これまで彼女と話す機会は一度もなかった。遺言状の開封のために彼女を訪れたフランソワは、ハンティングやホームバーの設えなど、父の隠された面を知ることになる。至って普通の女性である彼女と向かい合って、「自分が女性という存在を理解したことが一度もないという事実」が、ますます明確になったのと同時に、「彼女はぼくの父親から何か素敵なものを感じ取ることに成功した。母もぼくも父に見つけることができなかった何かだ。[……] ごく平凡な高齢の男性に、彼女は、初めて愛することのできる何かを見つけたのだ」<sup>29)</sup>と語られる。ここには、父が自分の魅力を感じることができない生涯の女性と出会い、安らかな生活を送ることができた一方で、息子はそうした理想の所帯の実現を継承できていない、という認識が示さ

---

28) Quantin, *op. cit.* <http://amzn.eu/fHklSsqo>

29) 『服従』一八七頁。 *Soumission*, p. 194.



れていると言えよう。

ウエルベック自身、父と息子の関係は『地図と領土』（2010）において初めて描かれたことを自認しているが<sup>30）</sup>、『服従』においてもささやかながら語られている。イスラーム系大統領モアメド・ベン・アッベスの新しい政策は家族を基盤とするものであり、そのなかでとくに父と息子の絆は知性や技術、経営術や財産の継承——賃金労働への移行で現代社会が失ったもの——に基づくとされている<sup>31）</sup>。そして結末、イスラーム教の改宗にともなってフランソワが夢見るのは女性たちとの結婚であり、「何年前にほくの父に起きたように、新しい機会がほくに贈られる。それは第二の人生で、それまでの人生とはほとんど関係のないもの」なのである。成し遂げられずにいた父の遺産の相続が語られるのであり、こうした継承という主題は母との関係には決して見出されないだろう。実際、相続されるのは、「自分を愛してくれる女性」とも言える。

ここまで示してきたように、フランソワはユイスマンスの道行きをたどりながらも、ユイスマンスが至った宗教的回心からは距離をとり（ユイスマンス自身が滞在したりギュジェ修道院への訪問も失望に終わる）、イスラーム教への改宗についても、女性たちとの出会いと所帯の形成という大きな動機としてあった。家庭という主題は次章で扱うとして、ロカマドゥール訪問と大学退職後、生きたいという欲望が欠如していくなかで、フランソワは解決策を女性に探る。

女性は人類ではあるが少々異なるタイプの人間性を象徴するが故に、人生にある種のエキゾチスムの香りを与える。ユイスマンスもほとんど同じ図式でこの問題について問うことがあったかもしれない。

30) «Sous la parka, l'esthète», *Les Grands Entretiens d'Artpress: Michel Houellebecq*, Artpress, 2012, p. 50.

31) 『服従』一九五頁。 *Soumission*, p. 203.

[……] ユイスマンスは最終的には他の道を辿り、「神性」のもっとラディカルなエキゾチスムを選んだ。しかし彼のその選択はほくをいつでも戸惑わせるのだった<sup>32)</sup>。

ユイスマンスの宗教的回心をエキゾチスムに還元しつつ、女性という他者が生み出す「香り parfum」——料理における香辛料であるかのように——に救いの可能性を見出している。ユイスマンスの回心は、キリスト教の宗教的真理や信仰というよりは、典礼にともなうミサ音楽や聖具の美といったものに心惹かれた上での改宗であったことはつとに指摘されるが、フランソワはりギュジェ修道院の訪問の際、ユイスマンスが実は神の問題に向かい合っていなかったのではないかと疑問を呈している。ユイスマンスは修道院の外で暮らすことを許されていたし、「彼には女中がいて、彼にとっては大きな意味を持つブルジョワ風の料理を作っていた」<sup>33)</sup> という指摘は、「料理」という『服従』そしてユイスマンス作品の隠された主題を明らかにするとともに、宗教観に関する表面的な差異を超えて、ウエルベックとユイスマンスが通じ合う「エキゾチスム」があることを浮かび上がらせるものだろう。

### シヨールペンハウアー vs ニーチェ

それでは、イスラーム教への改宗はどのように語られ、女性嫌悪と関係づけられるのか。本書後半、ルディジェの邸宅——『O嬢の物語』を記したドミニク・オーリーと文芸批評家ジャン・ポーランが暮らした家——に招待され、イスラーム教への勧誘を受けたフランソワは、彼の著書『イスラームに関する十の問い』や論文を読み進める。フランソワはルディジ

32) 同書、一九九頁。Soumission, p. 207-208.

33) 同書、二五六頁（筆者強調）。Soumission, p. 265.

エの思想に、ニーチェの反キリスト教主義を感じとる。

「イスラームがキリスト教を嫌悪していたのにはいくつもの理由がある。イスラームは第一の条件に男性を置くからだ……」と彼〔ルディジェ〕は『アンチクリスト』の著者からこう引用していた。キリストの神性という考えは、ルディジェにとっては根本的な過ちであり、それが、人間中心主義や「人権」へと否応なく人々を導いたのだ。[……] 年を取るにつれて、ほく自身もニーチェに近づいていた。[……] イエスは人間を愛しすぎた。それが問題なのだ。人間のために十字架にかけられるなんて、毒舌ばあさん *vieille pétasse* のニーチェだったら、少なくとも「趣味が悪い」と言ったことだろう<sup>34)</sup>。

神と人の橋渡しをするキリストという存在を提示してしまったがために、人間にも神聖さが、権利があるという思想ができ、それが無限大の自由と責任を負う社会を生み出してしまった——、こうした考えが、ウエルベック自身の現代社会批判の背景となることは否定できない。しかしここで注目したいのはジェンダー化された宗教認識であり、「イスラーム教=男性」「キリスト教=女性」という二項対立を形作ることによって、神への人間の服従、男性への女性の服従はそのまま、イスラーム教のキリスト教への勝利を意味するように導かれるのである。しかしそのうえでも、「ニーチェはその海千山千の娼婦 *vieille pétasse* のような嗅覚で真実を突いていた。キリスト教は最終的に女性的な宗教なのだ」<sup>35)</sup> と別のところでフランソワ

34) 『服従』二六三頁。実際、冒頭はニーチェの『反キリスト者』、断章 59 からの引用である。「回教がキリスト教を軽蔑するとしても、大いにその権利がある。回教は男性を前提にしているからである…。」『ニーチェ全集 14 偶像の黄昏 反キリスト者』原佑訳、ちくま学芸文庫、一九九四年、二七三頁。

35) 『服従』二一〇頁（筆者強調）。*Soumission*, p. 218.

に語らせるように、ニーチェを女性化している点も見逃してはならないだろう。女性的な優しさを示すイエスに対して、キリスト教神学に十分に「毒された」挙句にその糾弾に至るニーチェは、たしかに年老いた娼婦という名がふさわしいかもしれない。

しかし一方で、ウエルベックはニーチェよりもショーペンハウアーの思想に親しんできたことを繰り返し伝えている。ショーペンハウアーはユイスマンスはじめ世紀末の作家たちに影響を与えた哲学者である。『パブリック・エネミーズ』（2008）では、この箇所と同様、人権や人間の尊厳といった概念は信じないが、「倫理として唯一真実であるのは、ショーペンハウアーによって光輝く形で確認された共感 compassion ではないか。ショーペンハウアーによって当然のごとく称えられ、当然のごとくニーチェによってすべての道徳の源泉として糾弾された共感だけれども、自分はショーペンハウアーの側についていた」<sup>36)</sup>とベルナル＝アンリ・レヴィに語っている。「共感 compassion」は「共苦」とも訳せるように、他者の苦しみを理解し、共有するという感情であり、キリスト教的な同情の概念に近似するものである。一方で、ウエルベックはここで「ショーペンハウアーの側についていた」と過去形で記し、『服従』において「年を取るにつれて、ぼく自身もニーチェに近づいていた」とフランソワに語らせるように、ショーペンハウアーからニーチェへの移行をここに見ることも可能かもしれない。また、ユイスマンスによって美を称えられた、グリユーネヴァルトのキリスト像、すなわち受苦の身体に対する忌避が、『服従』においては顕著になっている可能性もある。

36) *Ennemis publics, op. cit.*, p.173. ウエルベックは『ショーペンハウアーを前にして』と題された、哲学者からの引用と解説で構成された小冊子を2017年に発表しているが、「…を前にして en présence de」という言葉が示すように、ショーペンハウアーの考えにつき従うというよりは、言葉という指し手によって哲学者と対局をするかのような作品となっている。Houellebecq, *En présence de Schopenhauer*, L'Herne, 2017.

いずれにせよ変わらないのは、こうした「共感」という行動原理を女性的なもの、さらには母性的なものとしている点である。『素粒子』（一九九八年）では、殺戮が支配する動物界にあっても「献身と愛他精神の唯一のしるしは母親の愛、あるいは保護の本能か、いずれにせよ徐々に段階を経て母性愛へと向かう何物かに表れていた」という、小学校の頃のミシエルの認識が示される。それは三十年たっても変わらず、「女のほうが男より善良なのだ。女の方が優しく、愛情に満ち、思いやりがあって温和。暴力やエゴイズム、自己主張、残酷さに走る度合いが男よりは低い」と大人になったミシエルは語っている<sup>37)</sup>。

『服従』においても〈女性〉や〈母性〉への回帰願望は衰えてはいない。「優しさ *tendresse*」や「献身 = 信従 *abandon*」としての愛を求める男性主人公の姿は、これまでの全作品を通して変わってはいない。一方で、それを宗教という枠組みで考えたときに、「女性的な」倫理としての「共感」を土台としながらも、苦悶するキリストへの共感の結果、人間に神聖さが宿り、そこから一人ひとりが権利を主張することで、共感の原則が崩壊してしまったキリスト教 = 西洋世界よりは、神と人間の間に絶対的な距離を保ち、ただ神に服従するという原理——これもまたウエルベックにとっては「女性的な」倫理である——を温存させているイスラーム教のほうが、魅力的なものに映ったのではないか。イスラーム教への改宗へと至る動機は一見、女性たちを手に入れるという軽薄なものに見える。しかしその裏

37) 『素粒子』野崎歓訳、筑摩書房、二〇〇一年、一七九頁。Les Particules élémentaires (1998), Flammarion, j'ai lu, p. 164. この箇所の後、次のように男性性は組上に上げられている。「男は何の役に立っているんだろう。大昔、まだ熊がうじゃうじゃいたころならば、男らしさは特別な、他に代えがたい役割を演じていたのかもしれない。だが数世紀以来、男はもはや明らかにほとんど何の役にも立っていないように思える。男たちはその倦怠をテニスの試合で埋めたりしているが、それだけならば害はない。しかし彼らはまた時として、〈歴史を先に進めてやる〉必要ありと判断する。要するに革命や戦争を起こしてやろうというわけだ。[……] 女たちの世界はあらゆる点から見てもはるかにすぐれているだろう。それはよりゆっくりと、しかし規則的に発展し、全員の幸福へと向かって後戻りせず、不毛な問いなしに進んでいくだろう。」(『素粒子』一七九—一八〇頁。Les Particules élémentaires, p. 165.)

には、より深い〈女性的なもの〉への追求が隠されていたとまとめることができる。次章では、この〈女性的なもの〉の具体的な様態を「食卓」という観点から考察していこう。

## 第2章 食卓と女性

### ユイスマンスの食卓

ウエルベックの作品は執拗に繰り返される仮借ない性描写で一般的には有名であるが、近年の作品では若干それが後退し、量としても少なくなっている。一方、『地図と領土』（2010）以降、前景化してきているのは食の描写であるように思われる。性から食へ——、それは作家の加齢から来る、一つの快楽から別の快楽への移行という問題であるよりはむしろ、食を提供する性という意味での女性に対する願望が表されていると言えよう。この章では、ウエルベック、ユイスマンス両作家による食卓像と性の関係について着目してみる。

フランソワのイスラーム教への（ありうべき）改宗が、『服従』の公的なクライマックスであるとすれば、それ以前にあるブリュッセルでの天啓もまた、もう一つのクライマックスである。それは「チキンのワートルゾーイと鰻のグリーンソースのどちらにするかでさんざん迷っている途中、ぼくは突然、自分は完全にユイスマンスを理解した、それもユイスマンス自身よりもっと完全に、と悟り、いつでも序文に取りかかることができる」<sup>38)</sup>という文学的啓示であり、ユイスマンスについて、格式あるプレイヤード版全集の編集を委託されたフランソワにとっては、序文の執筆を可能にし、社会的栄達もまた保証するような発見であった。

それは何か。ユイスマンスについてしばしば語られる宗教的禁欲と世俗

---

38) 『服従』二七〇頁。 *Soumission*, p. 279.

的欲望の葛藤というテーマは、実は重要ではなく、本当に彼が考えていたのは「身体的な苦悩から逃れられるかどうか」<sup>39)</sup> ということ、ユイスマンスがグリュネヴァルトの磔刑図に見たものは、ここでも脱神話化されている。人類のために苦悩するキリストを求めたのではなく、苦痛を逃れ快樂に向かうのが、フランソワがついに見つけたユイスマンス像なのである。さらにこれは次のように、単刀直入に示されることになる。ベルギーの郷土料理の選択に迷っている間に得られた啓示は、これまた食に関する発見である。

ユイスマンスの唯一本当の主題はブルジョワの幸福で、それは独身者には悲しくもアクセス不可能な幸福であり、上層ブルジョワの幸福でもない。『彼方』で称賛されている料理はどちらかと言えば実直な家庭料理とでも呼べるもので、[……] 彼の目に真の幸福と映っていたのは、芸術家の友人たちとの楽しい食卓、西洋ワサビのソースのポトフと「高級ではないが良質のワイン」、それから、外ではサン＝シュルピスの塔に冬の北風が舞っているのに、プルーンの蒸留酒と煙草を暖かなストーブの傍で愉しむこと<sup>40)</sup>。

ここで言う「ブルジョワ」は最初に述べたように、資産の多寡の問題ではなく、家族や家産を所有する階層としてとらえるべきであろう。実際、この素朴といってもよい食卓の場面は、ユイスマンスの『彼方』(1891)でたびたび描かれている。悪魔主義に溺れた中世の伝説的人物ジル・ド・レを調査する文筆家デュルタルは、パリのサン＝シュルピス教会の鐘つき夫妻と知り合いになり、何度も友人とともに夕食に招待され、会話を繰り広

39) 同書、二七一頁。Soumission, p. 280.

40) 同書、二七二頁。Soumission, p. 281.

げている。ポトフは物語終盤で供される料理であり<sup>41)</sup>、序盤、二度目に招かれた食卓では、「デュルタルは寒さにいじけた心が突然ゆるみくつろいで、まるでぬるま湯につかってほうと上気したような気持がした。カレ夫婦のそばにいと、遠くパリを離れて、現代から抜け出したような気持ちにするのであった。[……] その住居はいかにも貧しげであったが、非常に打ちとけた、柔らかな、そしてなごやかな気分があふれていた。粗末なテーブル掛けの上に、使いふるしたランプが、メッキのはげた銀のような光を広げていて、田舎風の食器や、さっぱりしたコップや、塩のきいた新鮮なチーズの皿や、林檎酒の壺などまでが、食卓の親しげな様子を助けていた」<sup>42)</sup>。男性独身者を文字通りの意味でもあたたかく迎える家庭であり、孤独に利用されるレストランと対比されているように、人々が気兼ねなく会話ができるような、親密な空間であることが特徴的である。裕福ではないカレ夫妻を慮って、デュルタルたちがアルコールなどを持参していることも言い添えたい。

ユイスマンスにおいて食が重要な主題となっていることは多くの研究で指摘されている<sup>43)</sup>。それはとりわけ前期作品について顕著であり、『流れのままに *À vau-l'eau*』(1882)では独身者フォランタンが理想の食事を求めてレストランを彷徨い歩く姿が描かれている。それは後年、理想の信仰の場を求めて教会や修道院を巡るデュルタルと構造的には同形をなしている。この段階でユイスマンス的食卓は、その大半が主人公の孤独によって

41) 「「お気に召すかどうか分かりませんが」と、カレの小母さんがいって、「何か変わったものを差し上げたいと思って、きのうからスープ鍋 pot-au-feu をかけて、お肉を支度しておきましたの。それで今夜は、お素麺のはいたスープと、冷肉のサラダに塩漬け鰯とオランダ三ツ葉とお添えしたのと、チーズでいためた馬鈴薯のおいしいビューレと、果物とを差し上げますわ。それから、近頃まいりました新しい林檎酒をご賞味していただきましょう」(『彼方』(第22章)、前掲書、三九二頁(一部訳語を変更している)。Là-bas (1891), Tresse & Stock, 1895, p. 430.)

42) 同書、(第5章)七六頁。Là-bas, op. cit., p. 81.

43) Geneviève Scotte, *Le Festin lu. Le repas chez Flaubert, Zola et Huysmans*, Liber, 2009, p. 217-263; Jean-Pierre Richard, «Plaisir de table, plaisir de texte», *Microlectures*, Seuil, 1979, p. 135-148.



特徴づけられるが、『彼方』によるカレ夫妻の食卓は共食の場であった。リアリズム作家の食卓の描写を分析した『読まれる祝宴』のジュヌヴィエーヴ・シコットによれば、ユイスマンスにおける成功した食卓は、聖体拝領的な面を有するとともに、食べ物だけでなく言葉もまた分かち合われる対話の場であり、食欲は知識欲へと連動していることを告げている。たとえば『彼方』の食卓では同時に宗教やジル・ド・レの会話が進むが、黒ミサといった際どい話題は「カレおばさん」が台所に消えるのを待って切り出される<sup>44)</sup>。また知識を披瀝する台詞が続く単調になりがちな箇所も、料理を持ってくるカレおばさんにより別のトピックが挟み込まれることで、読者もまた食卓に招かれたように、登場人物たちの言葉をともに味わうことができる。一般的に言われる「食のコミュニケーション的効果」以上に、物語論的機能として、料理は対話を進行させるのである。

### ウエルベックの失敗した会食

『服従』においてこのような料理の効能は、たとえばマリー＝フランソワーズ、タヌール夫妻に招待された場面に見ることができる<sup>45)</sup>。先述したように、諜報機関に勤めていたタヌールから、フランソワは次期大統領モアメド・ベン・アッベスについての興味深い話を聞くが、この話を導くのはマリー＝フランソワーズがふるまう、林檎と胡桃のランド風クルスタードで完結する「何年ぶりかの最高の食事」<sup>46)</sup>である。マリー＝フランソワーズはフランソワの同僚の大学教員であったが、イスラーム政権が発足

44) Sicotte, *op. cit.*, p. 257.

45) 以下、ウエルベック作品における料理の主題については以下を参照。Jean-Marc Quaranta, *Houellebecq aux fournaux*, Plein jour, 2016. この著作は作中で料理が果たす意味の分析のみならず、実作もふまえて作成されたレシピも掲載している興味深い研究書である。

46) 『服従』一五一頁。Soumission, p. 159. 以下も参照。「彼女は空豆とタンポポ、削ったパルメザンチーズのサラダを用意していた。それはあまりにも美味しかったので、一瞬、話の流れを逃してしまいそうになった。彼は話を続けた。」同書、一四五頁。Soumission, p. 152-153.

する可能性が高くなったことで、大学では勤められなくなることを予想して家庭に入ったことも注意してよいだろう<sup>47)</sup>。既に見たように、タヌールはロカマドゥールに行くことをフランソワに勧め、シャルル・ペギーの詩「イブ」を朗唱して、聖母マリアへの畏敬の念の強さ、中世キリスト教の魂を訴えるが、それを聞くあいだ、フランソワは「他者を理解することはかなり難しく彼らの心の底に隠れているものを知ることと同様で、アルコールの助けがなければたどり着けないだろう。この、小綺麗で身なりがよく、教養があり皮肉屋の老人が詩を朗唱し始めるとは、驚きでもあり心打たれる光景でもあった」<sup>48)</sup>と思う。ここでもまた、アルコールがコミュニケーション——『服従』の冒頭で宣言された、文学作品を読むことで得られる「他の人間の魂と触れ合えたという感覚」——を実現する助けとなることが示唆されているだろう。

しかし一方で、このような成功した食事の反例とも言うべき場面も『服従』には用意されている。まずはこの場面が続くロカマドゥール訪問の挿話である。すでに見たように、フランソワは回心寸前に至りながら、荘厳な聖母子像との距離を埋められないまま時を過ごすのだが、フランソワによる自己分析はきわめて形而下的なものである。「もしかしたらぼくは単に空腹だったのだろう。昨晩は食事を摂るのを忘れてしまっていたし、多分ホテルに戻り、鴨のもも肉なんかを前にテーブルに着いたほうが、神秘的な貧血状態に陥ってベンチの間に崩れ落ちるよりましなのかもしれな

47) 「彼女がオープンキッチンであれこれと準備をし、「女料理人を叱らないで、それは旦那さまの仕事ですから」と印刷された面白いデザインのエプロンをしているのを見ると、数日前まで博士課程のゼミを受け持ち、バルザックが『ベアトリックス』のゲラに手を入れていたときの特殊な状況について講義していたとはなかなか想像ができなかった。」同書、一四四頁。Soumission, p. 151. 『地図と領土』では、刑事ジュスランと妻エレヌの関係がこれに近いだろう。フランスの地方料理から他国の料理までレパートリーを広げ、極東の料理の入門講座に登録しているエレヌは、大学で経済学を講じることに失望しており、「大学に行く用事のなかった日はいつでもそうなのだが、くつろいだ、幸福そうな様子をしていた。」(『地図と領土』前掲書、三〇〇頁。La Carte et le Territoire, op. cit., p. 326.)

48) 『服従』一五三—一五四頁。Soumission, p. 161.

い」<sup>49)</sup>。空腹によって回心が操作されるのかもしれない、と信仰を脱神話化するとともに、ユイスマンスが賛美する苦悩するキリスト像と異なる、食という快楽を土台とした生のあり方がここではほのめかされている。

次に、これもすでに見た、フランソワと大学生の恋人ミュリエルの自宅でのやりとりである。家父長制に反対しないフランソワに対して、ミリアムは「あなたは本調子じゃないみたい。自分は男性同様考えたり決定したりできると思っている。だとすると、私はあなたに捨てられるの?」と問いただす。彼は答えることをためらうが、沈黙が支配するなか、注文したデリバリーのスシは届かないままである。

ほくは彼女に子どもを作らせる気もなければ、家事を分担したりおんぶ紐を買ったりする気もないのだった。ほくはセックスする気もなかった。いや、少しはする気はあったけど同時に死にたい気もあり、もう何をしたいのかよく分からず、軽い吐き気さえ覚えた。「スピードスシ」は何をしてるんだ?<sup>50)</sup>

この場面を締める、「スシは彼女が去ってから何分か後に届いた。すごい量だった Il y en avait beaucoup」という言葉は、悲哀とともにユーモアまで感じさせる表現だが、物語上、料理の欠如がコミュニケーションを失調させる例だと言えるだろう。

もう一つの例は、フランソワがふと思い出した、学生時代の友人ブリュノが結婚したアンヌリーズの悲劇である。フランソワは彼らからホームパーティーの招待を受けるが、企業で働くアンヌリーズにとって、平日夜の食事の準備は難題であった。

49) 同書、一六二—一六三頁。Soumission, p. 169.

50) 同書、三八頁。Soumission, p. 44.

彼女は一日中働いて疲れ切っていて、それに、六チャンネルの番組『ほぼ完全なディナー』の見過ぎで分別を失い、手間をかけ過ぎて行く先の見えなくなった料理を出していた。モリーユ茸のスフレは絶望的で、ワカモーレも失敗であることが明らかになると、ぼくは彼女が泣き出すのではないかとさえ思った。[……] アンヌリーズが、憎しみを込めた視線をタブレ [レバノン風サラダ] に投げかけつつカナッペに崩れ落ちたとき、ぼくは彼女の人生、そしてすべての西欧女性の人生について考えた<sup>51)</sup>。

メディアによって亢進される、自らの価値を高めるための着飾る料理は、フランソワがユイスマンス文学の本質とした、素朴な家庭料理を共に食べることの幸福と鮮やかな対比をなしている。このような自由競争を求める現代社会に対する批判はウエルバック作品の基調をなすものだが、ここでは恋愛という競争における美や若さの追求という問題に加えて、料理という家庭を舞台とした要素を例にして語られるのが注目されよう<sup>52)</sup>。料理は家庭外の人々を誘惑するための「価値」なのではなく、共に食べる人たちを満足させ会話を進めるものである、とフランソワ＝ウエルバックは言いたげである。

しかしこの食卓で、男たちは何をやるのだろうか。夫ブリュノはすでに酔っ払っており、フランソワは手伝おうとするものの、子羊の骨付きロースを真っ黒焦げにしてしまう。「ぼくは最後に帰った客の一人だった、アンヌリーズが片付けるのを手伝いもした、[……] ぼくはただ、彼女に、

51) 同書、八八―八九頁。Soumission, p. 92-93.

52) 服飾についても引用箇所後に言及されている。「朝、おそらく彼女はブラッシングをして、自分の職業のステイタスに適うよう細部まで気を遣いながら服を選び、彼女の場合はセクシーよりもエレガンス中心だろうが、とは言っても、その配分は複雑で、[……] 午後九時に疲れ切って家に帰る [……] すべてのエネルギーを使い果たし、トレーナーとジョギングパンツに着替え、このようにして彼女は自分の旦那様、ご主人様の前に出てくるのだ。」同書、八九頁。Soumission, p. 93-94.

一種の連帯感、役に立たない連帯感を感じてもらいたかったのだ<sup>53)</sup>と、先述したようにウエルベックが重視する「共感=共苦 compassion」と関連する価値観を提示しているが、自由競争社会の苛烈さを前には「役に立たない連帯感 *solidarité vaine*」というように無力感を漂わせたままなのである。

### ポトフ——「乳を与えるのにも似た優しい関係」

ユイスマンスとウエルベックはともに家庭料理を称揚し、独身者である主人公は家庭の純朴な食事に招かれることで、登場人物の間に幸福なコミュニケーションが成立し、物語が進行するという設定を行っている<sup>54)</sup>、とまとめられるだろう。フランソワは「独身者には悲しくもアクセス不可能な幸福<sup>55)</sup>」としているが、一時的にはアクセス可能な幸福とも言えるであろう。先述したミリアムは、結局大統領選挙の決選投票の結果を待たず、極右政権であれイスラーム政権であれ、ユダヤ人にとっては危険だという理由で、両親と共にフランスを離れイスラエルに移住することを告げる。一夜を共にした後、昼食を両親ととるために彼女はフランソワと別れる。フランソワはかつて彼女の両親の家に温かく迎えられたことを思い出す。

父親がシャトースフ・デュ・パプの瓶を開けたとき、ぼくは突然、ミリアムは二十歳を過ぎても毎晩両親とご飯を食べているのだと気が付いた。そして弟の宿題を手伝い、妹と服を買いに行っているのだ。そ

53) 同書、八九—九〇頁。*Soumission*, p. 94.

54) ジャン・ボリはユイスマンス『彼方』の料理を列挙して分析する際に次のようにまとめている。「家族的な雰囲気は主人公の想像力を自由にするが、物語を脱線させて危うくするところまでは至らないようにしている。独身者は、自由な立場を保ちながら家庭に迎えられ、少年のままであるかのように、生意気で、芸術家気取りで、物知りで、何かに熱中した人であり続けるのである。食べ物主人公の強迫観念を補い、純粹にし、養うのである。」Borie, *op. cit.* <http://amzn.eu/cPT9yPf>

55) 『服従』二七二頁。*Soumission*, p. 281.

れは確乎とした血縁で結ばれた一族 tribu、結束の固い家族なのだ。ほく自身の経験と比べてあまりにも見たことがない様子に、ほくは泣き出しそうになるのを抑えるのに苦労したのだった<sup>56)</sup>。

「あなたはどうするの」というミリアムの問いかけに、「ほくにはイスラエルはないから」<sup>57)</sup>とフランソワは答えるが、そこには宗教的・政治的含意だけでなく、シェルターとなるべき家庭のないフランソワ、さらにはいけば西洋社会全体の孤独が示唆されていると言えよう。

このようなユイスマンスとウエルベックの食卓において最も象徴的な料理は、ポトフである。ポトフ pot au feu の原義は「火にかけた鍋」であり、まさに「暖炉=家族 foyer」においてゆっくりと煮られた家庭料理の代表と言える。すでに見たように物語の終盤、フランソワはブリュッセルでの「啓示」を受けたが、すぐにパリに帰って『彼方』の会食の場面を読み返して、フランソワが発見した家庭料理は、寒い季節に愉しむ「西洋ワサビのソースのポトフ」であった（『彼方』で登場するのはポトフと西洋ワサビ添えのソーセージだが）。

このポトフは、『彼方』を通してここで初めて登場するものではない。すでに見たアンヌリーズの挿話の直後、フランソワは「ユイスマンスの小説の中で最も優れていたという記憶」があった『所帯で *En ménage*』（1881）を読み直し、損なわれることのない読書の快樂を見出す。

長く続いた夫婦のぬるま湯のような幸福がこれほどの優しさで描かれたことは今までになかった。「もう少しすると、アンドレとジャンヌは、時折一緒に寝ることに、心穏やかな優しさ、母親のような満足だ

56) 同書、一〇六頁。Soumission, p. 111.

57) 同書、一〇七頁。Soumission, p. 112.

けを抱くようになった、ただ、お互いが並んで横になり、話をし、そのあとお互いに背中を向けて静かに眠りにつくこと」。それは美しいが、そんなことが本当に可能なのだろうか。それはもちろんのこと、食卓の快楽に結びついている。「美食は彼らの感覚が無関心を増すのに比例して、彼らの家に新しい関心をもたらした。それは、肉体の快楽を禁じられるなか、繊細な食事や古いワインにいななき声を上げる聖職者の情熱にも似ていた」。女性が自ら野菜を買い、皮を剥き、肉の下ごしらえをし、何時間もかけて煮物を作っていた時代、人に乳を与えるのにも似た優しい関係が発展することがあったのだろう<sup>58)</sup>。

ここで『所帯で』から引用されている箇所は、主人公アンドレが妻ベルトと別れた後、かつての恋人ジャンヌと再会し、女中メラニーも交えた同居生活の中で現れ出た二人の姿である<sup>59)</sup>。性の快楽から食の快楽への移行と読めるが、特徴的なのは、二人が得る満足が、「人に乳を与えるのにも似た優しい関係 *une relation tendre et nourricière*」において成立する、「心穏やかな優しさ、母親のような満足 *de béates tendresses, de maternelles satisfactions*」であること、すなわち母性と優しさが強調されていることである。『所帯で』から引用されている箇所の前後には、「変わることものない単調な *monotones* 幸福」「所帯の温もり *tiédeur* のなかに、アンドレは気持ちを落ち着かせ鎮めてくれる水に身を浸すように沈み込んだ」<sup>60)</sup>という言葉が見られる。フランソワが「優しさ」といったものを、ロカマドゥールの聖母子像に見つけられなかったことも想起できるだろう。禁欲状態に置かれた聖職者が少しばかりの嗜好品に強烈な快楽を見出すと

58) 同書、九〇頁。*Soumission*, p. 94-95.

59) 『所帯で』における女性像については次も参照。福田桃子「ユイスマンスの小説における芸術家と女性：『世帯』をめぐって」『フランス語フランス文学研究』第97号（2010）、一六三—一七五頁。

60) Joris-Karl Huysmans, *Roman I*, Robert Laffont, 2005, p. 429.

いう言及は、フランソワ＝ウエルベックによる「キリスト教者」ユイスマンスへの当てこすりが見られる。フランソワが見出したユイスマンスの本質は、後期の改宗から前期の作品や『さかしまに』を読みなおす形では見られないものであり、むしろ前期の独身者文学から後期のキリスト教文学を逆照射し、後期においても変わらないもの——母性的優しさを求めるユイスマンス——を明るみにする試みと言うことができよう。

実際、ユイスマンスの時代から一世紀以上経過して失われた財産は、フランソワ＝ウエルベックにとっては宗教ではないとされている。それは「ポトフ女 *femme pot-au-feu*」と称される存在である。この言葉はウエルベックの発明でもユイスマンスの発明でもない。これはボードレールが「若い文学者たちへの忠告」で彼らに薦める女性の類型を示す際に出てくる言葉であり、正確に言えば「すなわち娼婦たち *filles* か馬鹿な女たち *femmes bêtes*、恋愛もしくは煮込み鍋 *pot-au-feu*」<sup>61)</sup> である。

清純で男を甘えさせてくれる〈ママ〉と性的快楽を与えてくれる〈娼婦〉、〈白い女〉と〈赤い女〉などさまざまに変奏される、女性嫌悪の典型とも言うべき言説だが、ボードレールにおいては二者択一であり、さらに「ポトフ女」を「馬鹿な女」と同一視しているのに対し、ここでは〈若い女＝性を満足させる女〉が年月とともに〈ポトフ女＝家庭的な女〉に変化するの、「女性の秘められた欲望であり自然な性質」<sup>62)</sup> としているのが特徴的である<sup>63)</sup>。後に出てくる一夫多妻制への願望の伏線となっておりと同時に、宗教よりも〈若い女〉よりも失われつつある〈ポトフ女〉への強い希求を示している<sup>64)</sup>。

61) Charles Baudelaire, «Conseils aux jeunes littéraires», *Œuvres complètes II*, éd. Claude Pichois, Gallimard, Bibl. de la Pléiade, 1976, p. 20. 『ボードレール全集 V』阿部良雄訳、筑摩書房、一九八九年、三三七—三三八頁。

62) 『服従』九一頁。 *Soumission*, p. 95.

63) Quaranta, *op. cit.*, p. 293.

64) 「若い女に容容するのはそれほど難しいことではない、ベアルネーズソースをこしらえる方が難



もちろん、〈ポトフ女〉というイメージのなかには、与えられることだけを前提とした男性のファンタズムが強く反映されている。食においても性においても、女性に純粋な贈与を期待するフランソワ＝ウエルベックには、女性嫌悪、正確には女性への過剰な期待があることは否定できない<sup>65)</sup>。ジャン＝マルク・カラントが『料理中のウエルベック』で指摘しているように、『地図と領土』では登場人物としてのウエルベックが主人公ジェドを、手ずから作ったポトフでもてなす場面があるにしても<sup>66)</sup>、食卓を準備するのは基本的には女性に委ねられている。「服従」というモチーフには、人間の神への服従だけでなく女性が男性に服従する姿を暗示されており、ウエルベック自身が男性として支配するよりも、〈女性＝子ども〉となって〈神＝母なるもの〉に従属する側に立っているとしても<sup>67)</sup>、服従の倫理を一方向的に女性性と結びつけて作品を構成してきたことは明らかであろう。『服従』において、ユイスマンスから引き継いだウエルベックの食卓のユートピアは、女性にとってのディストピアになりかねないのではないか。

---

しくらいだ。それでも、そういう女性を、ユイスマンスは探しても見つけられなかったのだ。そして、それはほくが今のところ見つけることのできないでいる女性でもあった。」同書、九三頁。別の場面では、フランソワはTGVで、パソコンを前にしてため息をつくアラブ人の男性ビジネスマンと、その前でふざけ合う若い妻たちを見かけて、彼女たちはこのような子ども（「若い女」）から急激に母に変わる、「もちろん彼女たちは自立性を失っているのだが、自立性などくそくらえだ」（『服従』二一九頁。Soumission, p.227.）という思いにふける。現代西洋社会の要石とも言える「自立＝自律 autonomie」の概念について問いただしつつ（しかも女性を家庭に入らせるという新政府の政策によって失業率は激減した、とされる）、フランソワ＝ウエルベックの女性に対するファンタズム（若い女か、家庭的な女性か）が実現されていると言える。以下の分析も参照。Louis Betty, *Without God: Michel Houellebecq and Materialist Horror*, Penn State University Press, 2016. <http://amzn.eu/2hJxigj>

65) 『プラットフォーム』では、主人公ミシェルは恋人ヴァレリーに対して以下のように語りかけている。「君は悦ばせることが好きなんだ。自分の肉体を心地よい対象として人に差し出し、悦びを無償で与える。そこだよ。それこそがもはや欧米人にはない能力なんだ。欧米人は完全に贈与の感覚を失っている」（『プラットフォーム』中村佳子訳、角川書店、二〇〇二年、二四四頁。Plateforme, Flammarion, J'ai lu, 2001, p. 236.）。

66) 『地図と領土』前掲書、二三五頁。La Carte et le Territoire, op. cit., p. 263. Quaranta, op. cit., p. 239.

67) Bruno Viard, *La République insoumise. Réponse à Michel Houellebecq*, Mimésis, 2017, p. 82.

## 結論にかえて

ここまで女性嫌悪という主題をめぐる、ユイスマンスとウエルベックにおける宗教（第1章）と食卓（第2章）について論じてきた。両者に共通するのは、同時代の物質主義的社会（19世紀末）や自由競争社会（20・21世紀）に対して、神の存在ではなくとも宗教的なものの必要性を痛切に感じ、それを女性的なものと重ね合わせていることである。ユイスマンスは人類のために犠牲を受け入れた苦悩するキリストを尊び、一方でウエルベックは、ただ神に服従するという原理を受け入れながら、人類が食や性といった快楽を手放さないでいられる枠組みを保持するために、イスラーム教に対する逆説的な憧憬を表明するのである。食卓に関する想像としては、両者とも食事の場面を物語の隠された主動因として導入し、宗教小説や政治小説という知識の披瀝になりがちな物語構造に変化を与えるのと同時に、共に食のことの宗教を超えた意義を見出している。一方で、その料理を作る役割が、多くの場合女性に限定されていることで、食卓の幸福を享受する上でのジェンダーバイアスも明らかになった。両作家を隔てる時間において、宗教ではなくむしろ食卓をめぐる役割分担についてのファンタズムがフランソワの発言に見られるという事態は、女性の家事労働の問題が女性の社会進出が進んだ現在でも残り続けていることを裏付けるものと言えよう。

一方、ウエルベックの「女性嫌悪」の背後には母に対するアンビヴァレンツな感情があり、『服従』においては、主人公の母の死の実存的・物語論的な軽さと、それに対する父からの遺産継承（自分に愛を与える女性との第二の人生）によって表されていた。『地図と領土』以来の父・息子の間での女性という財産の相続は、作中人物どうしだけでなく、ユイスマン

スとウエルベックの間でも起こっているのではないか<sup>68)</sup>。ユイスマンス研究者を主人公にし、この世紀末作家の作品の分析を語らせることで、ウエルベックは男性独身者小説という彼自身採用してきた形式を歴史化し、ユイスマンスとは異なる自らの立ち位置を示すのである。伝承という主題は、作中の物語内容だけに関わるのではなく、古典作家から現代作家の間の「文学」をめぐる遺産継承の問題へとつながっている<sup>69)</sup>。それでは父・息子ではない関係、母・息子、父・娘、さらには母・娘という伝承の形態は、ウエルベック作品においてありえるのか？ ウエルベックの作品を、性に関するイデオロギー分析にとどまらない形で、ありうべき家族像というファンタスム（ファミリー・ロマンス）がどのように成立しているかを考察することを今後の課題として、本論を閉じたい<sup>70)</sup>。

68) Antoine Jurga, «Michel Houellebecq, auteur classique?», Wesemael (éd.), *Lectures croisées, op. cit.*, p. 27.

69) 本論では言及しなかったが、『服従』においてフランソワにイスラーム教への改宗を説得するルディジェも、自宅に招いて料理を提供するが、そこで出されたワインが「ムルソー」という名であり、ランクの高いワインの産地でありつつも同時に、『異邦人』の主人公を示唆する名でもあるのは興味深い。カミュとウエルベックの関係について、植民地主義やオリエンタリズムという変数を考慮しつつ、ユイスマンスとは別の、傍系とも言える系譜がたどれるかもしれない。次の分析も参照。Alessandra Benedicty-Kokken, "Houellebecq's Compelling Repulsiveness: Post-secularism, Aesthetics, and Whiteness in *Soumission*", p. 7. [https://mla.hcommons.org/?get\\_group\\_doc=1000750/1512571062-ABK-December6article.pdf](https://mla.hcommons.org/?get_group_doc=1000750/1512571062-ABK-December6article.pdf) ウエルベックと過去の作家・思想家の系譜についての分析については次も参照。Bruno Viard, *Les Tiroirs de Michel Houellebecq*, PUF, 2013, p. 113-155.

70) 本稿は、日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究（B）「美術批評から見たフランス象徴主義の言説の場の再構成」による研究成果の一部である。